

## クロスリンク治療

## 円錐角膜の進行抑える

円錐角膜は、角膜が円錐状に突出し視力が低下する疾患。思春期に発症することが多く、進行するにつれ近視や乱視が強くなり、眼鏡やコンタクトレンズでも矯正できなくなる。重症化すると角膜移植が必要になることもある。片方だけではなく両目とも悪くなり、進行具合は左右で異なる。

以前はハードコンタクトレンズを使用すれば角膜表面を物理的に押さえつけるため進行を抑えられると考えられていたが、近年、その効果はないことが分かった。

発症の原因は分かっていない。目をこすることが一因とされ、近親者に患者がいれば罹患率が数十倍になる。日本人の有病率は137人に1人ともいわれている。初期の頃は一般的な検査機器では疾患を見つけることが難しい。眼鏡やコンタクトレンズでも視力が回復しなかったり、近視や乱視が強くなり左右差がある場合は、円錐角膜の可能性がある。

昨年9月に導入した治療は角膜クロスリンクという。角膜にリボフラビン(ビタミンB2)を点眼し、紫外線を照射する。コラーゲン線維が結合(クロスリンク)して角膜の強度が増し、進行を食い止めることができる。2003年にドイツで考案され、欧米では普及し安全性が確認され、日本でも標準治療になってきている。

センターは米食品医薬品局(FDA)で認可されている最新の治療機器を導入しており、角膜上皮を剥離しない方

上皮剥離せず  
術後痛み軽い  
角膜移植回避へ

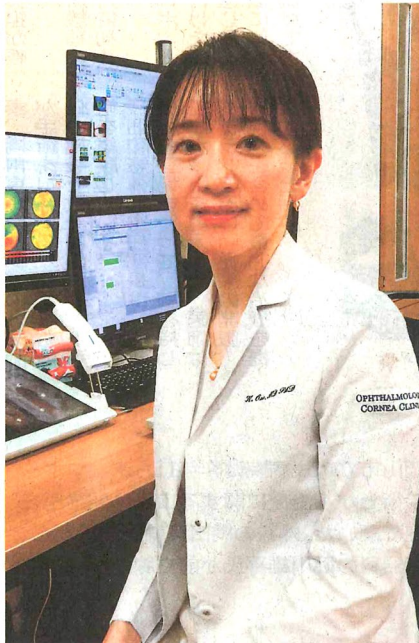
法で行うため、術後の痛みが軽く、感染症のリスクも低い。

角膜形状解析で円錐角膜が見つかった場合、経過を観察し、進行が確認された場合に治療をする。一般的には90%以上で進行抑制の効果があるといわれている。これまでに15人(昨年末現在)に対して治療し、全員、経過は良好という。

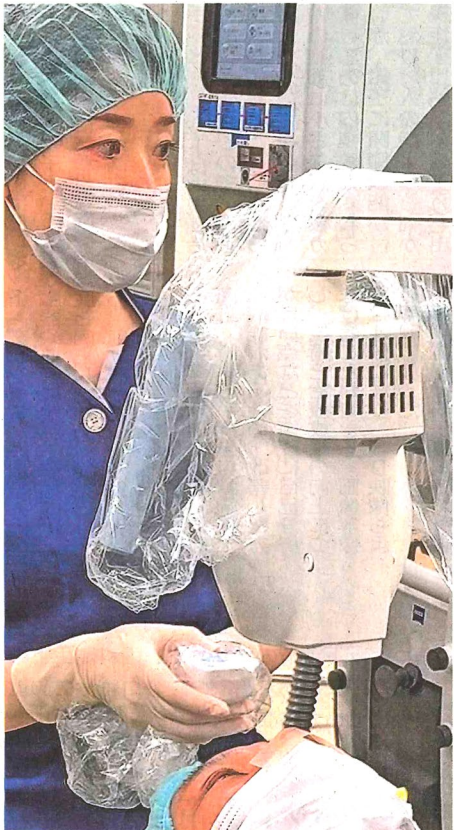
日帰りか1泊2日の入院で治療する。自由診療で、費用は片方の目ごとに20万円(入院は25万円)。

治療を担う小野恭子・アイセンター部長は東京大学病院眼科に勤務し、角膜専門外来を担当していた。同大学院で角膜再生医療を研究し、研さんを積んだ。

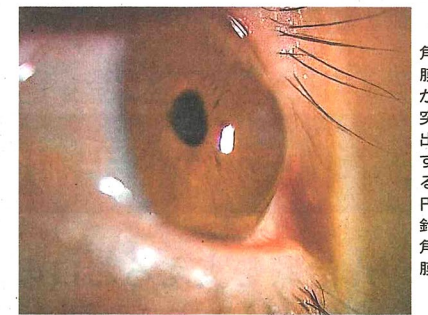
小野医師は「早期に発見し治療することで視力を守り、角膜移植を回避して充実した人生を送れるようサポートしたい。進行してしまうと治療の適応がなくなるため、早めに専門施設を受診してほしい」と話す。



小野医師



治療はリボフラビンを点眼し紫外線を照射する



角膜が突出する円錐角膜